

大学との定例懇談会（第4回）議事概要

1 日時 令和元年9月25日（水）15時30分～17時15分

2 場所 都庁第一本庁舎7階大会議室

3 出席者

（懇談会メンバー）

お茶の水女子大学	室伏 きみ子	学長
国士館大学	佐藤 圭一	学長
駒澤大学	長谷部 八朗	学長
首都大学東京	上野 淳	学長
上智大学	曄道 佳明	学長
中央大学	福原 紀彦	学長
津田塾大学	高橋 裕子	学長
帝京大学	冲永 佳史	学長
電気通信大学	阿部 浩二	副学長
東海大学	山田 清志	学長
東京大学	津田 敦	副学長
東京医科歯科大学	吉澤 靖之	学長
東京外国語大学	林 佳世子	学長
東京工業大学	益 一哉	学長
東京農工大学	大野 弘幸	学長
東京理科大学	平川 保博	副学長
東洋大学	松原 聡	副学長
立教大学	郭 洋春	総長
早稲田大学	後藤 春彦	理事

※7校欠席

（東京都）

小池東京都知事、長谷川副知事、梶原副知事、宮坂副知事

山手政策企画局長、遠藤総務局長、武市財務局長

4 議題

（1）『長期戦略の策定に向けて』

5 議事概要

小池知事からの挨拶の後、東京都からの報告事項として、「東京2020大会パラリンピックに向けた観戦促進について」「福島県Jヴィレッジの活用について」「企業と大学を

つなぐ産学公連携相談窓口の紹介について」「大学研究者による事業提案制度の応募状況について」「使い捨てプラスチック削減キャンペーンの取組状況について」「五大陸国際学生シンポジウムの開催について」を報告。

その後、中国清華大学邱勇（きゅう・ゆう）学長から頂戴したビデオメッセージを放映した後、議題（１）について、東京都から概要を説明し、意見交換を実施。

主な意見等は以下のとおり。

【長期戦略の策定に向けて】

（人が輝く東京）

- ・人が輝く東京を実現する上では、人々がその資質、能力を十分に発揮して、幸せな人生を送り、また社会の活性化と持続的発展を図る施策が重要である。中でも特に幼児教育はその後の生活の質の向上に影響があるという研究結果もあることから、親の経済格差によって教育格差が生じることがないように、全ての子供たちが生まれながらにして持っている可能性を最大限高めていくような施策が求められる。都においては、ぜひ全国のモデルとなる施策を推進して欲しい。
- ・都が各自治体をリードして、それぞれが発展していけば、国の振興につながると思っている。その中心となるのが人の活躍であり、人間教育が重要となる。Society 5.0の実現は、人の活躍なしには成しえない。テクノロジーの進展に踊らされることなく、これを駆使してイノベーティブな思考、しなやかな意志を持ち活躍する人材が東京の発展の源泉になるのではないか。リカレント教育など、常に学び続け、主体性を身につけさせる教育を幅広い世代に展開し還元することで、共生社会で活躍する人材の育成を図っていきたい。
- ・人口の集積する東京で、国際的に通用する大学入学資格を得られるインターナショナルバカロレア（IB）認定学校をどんどんつくっていくことが、東京の魅力を発信することになると思う。問題は、IBプログラムを教えられる教員が日本には非常に少ないことである。このことから、他大学の皆さんとも協力して、教員人材を育てていくことが必要であると考えている。
- ・今年の入学生のうち女性が全体の1割程度しかいなかった。将来を担う技術開発系の人材として、女性を増やしたいと思っている。ここ二十数年でやっと5%が10%になっただけという状況であり、これを何とかしないといけない。2040年、2050年を見据えると女性目線の技術開発が絶対に必要である。
- ・意識をして女性は社会を変えるエージェントであることを発信していくことが必要である。
- ・医療だけではなくて、病気にならないことも大切と考えており、ホスピタリストの養成に力点を置いて、東京都に住んでいる外国人の方々にも、その恩恵がいくようにしたい。また、医学部とともに海洋学部もあり、船を所有しているので島しょ医療にも力を尽くしたいが、その際には都の牽引が重要と考えている。
- ・これからの日本、東京にとって大切なのは多様性である。人口は2025年をピークとして、その後減少するということであり、労働力人口の減少を考えると、海外からいかに多くの留学生を受け入れ、日本の文化、歴史、伝統、それに価値観を学んでもらいながら、日本で生活し、働いてもらうかが重要である。留学生だけに限らず、外国人に東京を選んでもらうためには、東京ならではの具体的なシーズをどのような形でつくっていくかが大事である。これから東京は、人と人とが心豊かに生活できるよ

うな街としていかに発展できるかが重要であり、東京に行けばこれが学べる、あるいはこれが得られるといった、それぞれの大学が持っているさまざまな知見や、経験を発信していくべきである。

- ・東京ならではのものをつくる際に東京が持っている特色は、各地方都市等では労働人口としての外国人が多くいるのに対して、東京では大学に所属する留学生たち、または発信力の高い人たちが多くいるということである。東京にある大学が一緒になってやれることとしては、大学等で学んでいる留学生たちと連携し、外国に向けて東京をアピールする、あるいは日本をアピールしていくことである。このようなマンパワーを活用する取組を検討してはどうか。
- ・東京を誰がつくっていくかという時に、都がその先頭である一方で、民間が東京の建設においてかなり大きな役割を果たしており、それは東京の重要な強みだと考える。一方、もう一つの主体である都民だが、都内の単身世帯率は5割近くにのぼり、このような状況で地縁型コミュニティにまちづくりを委ねることができるのか心もとない状況である。台湾では社区营造という参加型まちづくりが震災復興で生かされていた。例えば台北では地縁型コミュニティでは立ちいかななくなっており、社群という概念をつくり始めている。社群とは、地縁型コミュニティではなくて、テーマ円型コミュニティ、サークルのようなコミュニティを指し、そういったコミュニティの形成に関して大学の役割があるのではないかと考えている。地縁型コミュニティにかわるコミュニティを、都は次の目標として育てていかないと将来的には大変なことになるのではないか。

(安全安心な東京)

- ・少子高齢化、グローバル化、ダイバーシティ、多様化というものに対応した安全安心が今日求められている。
- ・東京の中小企業、特に海拔ゼロメートル地帯などでは、地震災害についての訓練は行われているが、豪雨や大水についての防災が遅れていると思う。災害時の備えとしては電源の確保が非常に重要であり、特に、各家庭、企業に例えば蓄電器といった設備が必要である。また、23区に人と金と物が集中する一方で、東京の西エリアについては、学校の空洞化が進んでおり、空き家の数もすくなく増えている。防災に強い都市東京を考える際に、西エリアの方に力を入れてはどうか。
- ・都市環境の整備において、大学のキャンパスがまちにおいてどのような役割を担うのか認識し、都市全体の防災機能の向上や、省エネ、緑化等で大学のキャンパスづくりと東京のまちづくりと連携、調和を図ることが重要である。大学のキャンパスは、土日はまるで公園のように都民が歩いてくれるようなキャンパスでなければならないと考えている。図書館や講堂等の施設を大学の学生だけでなく、キャンパスの立地自治体の住民が利用できるようにするなど、新たに大学キャンパスを整備する際には、大学と地元自治体とが手を結び合って、安全安心な都市環境としていく必要がある。

(世界をリードする東京)

- ・医療のビッグデータの解析は、病気の予防や医療費の抑制につながると考えている。現在、利用可能なデータだけでは継続的に見た病状の推移であるとか、健康状態を判別するには不十分である。そこで、東京を医療データ特区にしてはどうかと提案する。大学の研究機関と都立病院等が、連結可能な医療データを自由に活用できる環境があれば、都民、世界の人々の役に立つようなデータの活用ができる。データストックから症状別に提案すべきケアを判定できるアルゴリズムの開発まで幅広く都と協力でき

ればと考えている。

- ・最先端研究、あるいはイノベーションの創出を担う人材づくりにおいて、大学に求められる役割は非常に大きい。一方で、18歳人口の減少や研究力の低下が危惧されているなど、大学をとり巻く環境は非常に厳しい。先端研究、イノベーション創出において世界的な競争力が低下することは国力の低下に結び付くことである。こうした中、都において高等教育に対する積極的な投資を期待したい。東京の強みは、ダイバーシティの取組に代表される性別、国籍、宗教に関係なく多様な人材を受け入れる都市の自由さにある。世界をリードするものづくりの実践的な技術と専門知識を有した高度な人材によるイノベーションの創出を目指して、都政の重要課題に向けた研究面からのバックアップに取り組んでいきたい。
- ・都は長寿という言葉の世界共通語にするという未来像を抱いているが、平均的にいえば日本では高齢者は10年間の要介護期間を経て死に至る。こういった現実の中で、長寿という言葉を幸せなイメージなものにするためには、どういう医療、テクノロジー、社会システムが必要かを検討する必要がある。
- ・新しい産業を起こすためのベンチャーエコシステムとして、アントレプレナー道場等を開催するなど、大学を中心にいろいろな形で推進してきた。今後、このようなベンチャー企業が集積するポテンシャルの高い地区を、都と一緒により大きな規模に拡大していけば、20年後、30年後、または50年後の明るい東京という姿に一步でも近づくと考える。

(美しい東京)

- ・IT、医療、輸送食品等々では、ワンウェイプラスチックが必要不可欠なので、全てのプラスチックごみを削減するのは不可能である。まずはレジ袋と呼ばれているポリエチレンの袋と、それからペットボトル、この二つをキャンパスから一掃しようという運動を展開している。
- ・大学がやるべきことは教育と研究であるため、学生に対して啓発的に、快適さを少し捨てても地球を救おうという意識を持ってもらおうとしている。また、研究ではリニューアブル、石油由来のプラスチックにかわる天然由来のプラスチックで同等の機能を持たせるような素材をつくっていくような展開をしていこうと思っている。

(全国と共に歩む東京)

- ・学生たちがビジネス開発力、政策提言力を向上させながら、地域の創生、地方の創生に取り組んでいる。また、全国各地との連携を進化させ、日本全体の繁栄につながるということを具体的なプロジェクトとして学生たちが学びの中で取り組んでいる。23区の定員に規制がかかったが、23区内であるからこそ学べる特別な内容を地方にも波及させていくべきであり、だからこそ23区の定員を規制すべきではない。
- ・ジャンボの後輪という議論がある。これは、飛行機が離陸するとき前輪から離陸し、着陸するときは後輪から降りるというもので、前輪が東京であり大企業、後輪が中小企業であり地方だとすると、東京のほうが先に景気が良くなり最後に景気が悪くなる。地方はその逆である。この構造は、残念ながら今も変わっておらず、避けられない面があるかと思う。何とか前輪と後輪のギャップを縮める努力をすること、東京はそのために頑張っているということメッセージとして出すことが全国と共に歩む東京につながる。
- ・大学業界でもっとも問題共有されているのが定員の厳格化である。首都圏の大きな大学が定員以上に学生を受け入れると、地方の大学の定員減につながるため、その定員

確保のために、大学は厳格に定員を守れというもので、定員を超えるとペナルティがある。新学生の入学率の予測が難しいため、多くの大学で合格倍率があるのに結果的には定員割れとなっている。このようなことが、東京全体の産業等でも起きかねない状況だと思っている。

(その他)

- ・「未来の東京への論点」を見て、大きな期待や希望が湧くものを作成されたという感想を持った。一方で5年後には、また新たなものをつくらなければならないというくらい社会変化があると思う。挙げられている論点は、今ある課題の解決に当たったものになっているが、それによりさらに出てくる課題に対する言及がないことが危惧される点である。
- ・コミュニティやまちづくり等を学問的に網羅するものを各大学がつくるのは難しいが、都が主導して共通プログラムを東京の大学に横断的に置くような仕組み、仕掛けをつくり、そこに各大学のリソースが参加できるようなものがあるとよい。例えば大都市圏でのコミュニティ学、大都市における防災学といったようなものが配置されると、海外からの留学生にとっての求心力につながると思う。新しい切り口の学びの場を東京につくることも考えてはいかがだろうか。
- ・安定した生活環境空間をつくり、その中で自分の夢を持ち、目標に向かい行動するイメージというものが、人が輝くということであると考え。また、人が輝く東京というのは、全ての人が輝く東京であるべき。教育はアイデンティティをしっかり持ち、相手の話をしっかり聞き理解して、それから自分の意見を伝えるというように、物事をしっかり考えることが最も重要となってくる。その結果、その人の持つ力、個々の魅力が発展していく。夢がなければ、イノベーションもダイバーシティもうまく進まないと思っている。そのため2040年は夢のあるイメージとして取り上げて欲しい。

[知事]活発な意見交換に本日も感謝する。2040年のイメージに対する東京の強み、弱みというところで大変貴重な意見を賜うことができ、これらの意見を長期戦略へ結びつけていきたいと考えている。東京の出生率は現在1.23であるが、大胆に2.07という目標を掲げている。これに対しては色々な反応があり「そんなの無理だよ」という声はほとんどではあるが、無理だからといって行動しないとじりじりと下がってしまう。2040年、まばたきをするぐらいの早さで20年はあっという間に過ぎてしまう。その意味でさらに大胆に、またこうあればいいということをしつかりと書き込んだ長期戦略としていきたい。第7代の東京市市長である後藤新平が、帝都復興院総裁を務め大風呂敷を広げて、明治通りや靖国通り、それから昭和通り、今の幹線道路を「そんなの無理だ」と言われながらもつくったおかげでオリンピック・パラリンピックがこの東京で開催できると思っている。そして、後藤新平が残した言葉、「金を残す人生は下だ、事業を残す人生は中だ、そして人を残す人生は上だ」ということで、やはり人があってこそその東京であり、人があってこそその日本だと思っている。次世代を育てていく、またリカレント教育を通して人を活かしていくということで、これからも御協力をお願いしたい。

以上